

長野県革新懇ニュース

2016年9月号
(発行日9月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

207

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 市川英彦さんインタビュー
- 2面 1面続き、県政シンポジウム案内
- 3面 「若者として、市民運動をやってみて」 三石知志さん
「大北森林組合の不正疑惑問題について」 もうり栄子さん
- 4面 随筆「満州移民を宣伝した小説『大日向村』」堀井正子さん
「小林節夫さんを偲ぶ」 中澤憲一さん
本の紹介「富森啓児著『詩集 大いなる日にII』」
「富森由子著『風と花と青空と』」

URL: nagano-kakushinkon.com



1960年名古屋市立大学医学部卒業、62年2月JA長野厚生連・佐久総合病院内科入職、92年12月JA長野厚生連リハビリテーションセンター鹿教湯病院院長就任、03年4月同病院名誉院長就任、同年9月特別養護老人ホーム・ローマン上田嘱託医、09年9月現職就任

一人ひとりの人間が大切にされる世界を

いちかわ ひでひこ
市川 英彦 さん

(長野県高齢者生活協同組合理事長)

医師への原点・人の役に立つ仕事がしたい

Q 医師の道をすすまれた動機をお聞かせ下さい

私の生まれは、中山道が長浪川を横切った西岸にあった河渡という宿場町です。60戸の家が街道を囲んであり、一方は川で、両側は田圃でした。1.5kmほどの街道筋には、笠取峠と同じように松並木があり、今も一部が残っています。私は昭和10年生まれなので、6歳の時には戦争が始まっています。

その頃の思い出は、ついでないだまで一緒に遊んでくれていたお兄ちゃんたちが戦争に行くことです。2km位南に行つたところに東海道本線があるんですが、岐阜と大垣の間に穂積という駅に出征兵士の方を送りに行くのが習いで

した。そうすると在郷軍人がこう言えと教えるんですね。出征兵士が硬くなつて「お国のために命を捧げてきます」と言うんです。お国というのがわからなくて、友だち同士で「お国とはなんだ」と話し合い、それは故郷のことだと理解しました。故郷のために命を捧げるといふことなら、それは男の生きる道だと思つたんですね。実際は、お国と故郷は真逆の関係だつたわけですが、そんなことはまったくわかりませんでした。ただ人のために生きるというのがまともな生き方かなと漠然と思いついて育つていました。そうした思い出はずっと残っていました。

戦争が終わつて、昭和23年に中学生になりましたが、そのとき「新しい憲法の話」を教わつたんですね。その時の先生が杉山先生で50代ぐらいの方でしたが、その時こう仰つたんですね。「新しい憲法でもう君たちは天皇陛下の方を仰つて死ななくてもいいようになつたんだぞ。自分の思うように自分の人生を自由に生きられるようになったんだぞ」と。教室はシーンとして、みんな真剣になつて聞いていた教室の雰囲気はよく覚えています。先生は本当に涙を浮かべて、声をつまらせながら話をしておられました。あとで聞きましたら、自分の教え子がたくさん戦死して、そのことをすごく悲しまれたとのことでした。その先生は歌詠みで、昭和25年だったと思います。歌会始めの召人を選ばれて東京に行くんです。その歌は「雪消えて、若草もえる高原に牛を放つは幾年ぶりか」というものでした。

私は先生からそういう話を聞いていたので、憲法をたたえる歌だと勝手に理解していましたが、それで間違いないと思います。

そんなことから、事あるごとに憲法のことを意識するようになり、また、人のお役に立つ仕事がしたいと思うようにもなり、医学部に進むことにしたわけですね。運よく入れたもので、なんとなく無医村の医者になることを希望していたと思います。当時は医学部にすんだ学生の1/3ぐらいはそういう気持ちだつたと思います。無医村とか離島での勤務ということをかき多量の学生が想定してました。あの当時は若い者にそういう雰囲気があったように思います。

佐久病院を見学し、その理念に共感

Q 佐久病院に來られた理由はどのようなことですか

昭和27年頃のことだと思いますが、松本出身の評論家の白井吉見さんが中央公論に「ルポルターージュ 赤い病院」という記事を出したんですね。佐久病院のことなんです。当時いろんな社会的背景があつて、こんなセンターシヨナルな題名をつけたんじゃないかと思つています。ところが、その内容は、貧しい農民も近代的な医療が十分受けられるという医療の民主化のために、あくまで専門の科学と技術を通して、かつ農民の中にあつて農民とともに常に建設的なたたかひに取り組ん

でいるというものでした。専門の科学と建設的なたたかひというところが強調されていきました。それを読んで私はこれだと思つたんですね。当時はそんなに政治的な意識があつたわけではありませんが、大学では社会医学研究会に属してましたし、セツルメントにも少し関わっていました。

そんなこともあり、31年頃、みんなを誘つて佐久病院に見学に行きました。そこで若月俊一院長他多くの職員の方とお会いしたことで、山間の集落に検診に行つたことが大きかつたですね。当時、病院から24km程離れた群馬県境の田口峠に300人ぐらいの人が住んでいて、コンニャクと炭と養蚕で暮らしていたんですね。そこを紹介されて、検便や血圧測定をしたり、映画や指人形なんかを持つていくことを繰り返していたら、住民の方々とすごく親しくなつたんです。その二つがあつたものから、卒業したら来いというので、それが佐久病院に入つたきっかけでしょうか。そこでは白井さんが証明したように専門の科学と技術を通してということが実践されていて、当時はすでに農村医学ということを若月先生が提唱されていて、農村の環境のなかで起こつてくる病気やその治療についての研究と発表をされておりました。

命をかけて価値観を確立した若月先生

Q 若月先生についての思い出はありますか

若月先生は、昭和20年3月に佐久に來られています。治安維持法でつかまつて1年間牢屋に入れられたんですが、東大医学部の恩師から「君のような新しい考えをもつていける者は、生きのびて国民のために尽くしてくれないか」と言われて來られたのでした。病院はすでに17年にできていましたが、入院はできませんでしたが、21年には院長になられていました。私が行ったのは31年ですから、先生はその時は50を超えていたんです。そのときはメスはもう握つていませんでしたが、それまでの間にものすごい手術を沢山なさつていました。達者ですから、手術の間をぬつて検診にも出られ、22年から診に始めていたんです。初期の頃は5人程度で、南佐久全体を牛車に乗つて行つたそうです。その後、10年位の間はシステム化でき、院長が先頭に立つていくというような検診ではなくなつてきました。

若月先生の青年時代というのは大変なもので、命の極限状況に追い込まれるようなこともあつたそうなんですが、そういう中で、自分の生死をかけたがら自分の価値観、歴史観をつくり上げた方ですね。歴史観はしっかりしてました



【2面に続く】